

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】柴田 真希

【所属】(助成決定時) 東京芸術大学大学院音楽文化学音楽学専攻

【研究題目】山形県黒川能の謡本の所蔵状況と変遷に関する研究

【研究の目的】

本研究の目的は、山形県黒川能の謡本の所蔵状況と変遷を明らかにすることである。歴史研究の分野では、古文書を史料として、黒川能を伝承する村の制度の変遷や、外部での興行の様子などが明らかにされてきた。しかし、演能に際して用いられる謡本については、数多くの謡本が所蔵されているにも関わらず、調査は不十分といえる。現在、黒川では「黒川能謡本」という書式が統一された謡本が原則的に使われているが、出版は昭和 50 年代後半で、それ以前は各々の当事者が謡本に書き込みを加えながら伝承を維持してきた。したがって、謡本の所蔵状況を把握し、変遷をたどることは、黒川能の伝承が維持されてきた理由を、謡本を通して明らかにすることにつながると考える。民俗芸能の伝承は、口頭伝承に拠る部分が大きいと考えられてきたが、本研究は謡本という文字が伝承において果たす役割を明らかにすることで、民俗芸能の伝承研究分野に新たな可能性を提示することができる。

【研究の内容・方法】

助成期間である6ヶ月間(2009年10月～2010年3月)に複数回にわたって黒川に滞在をしながら調査を行った。対象としたのは、黒川能の上座の役者の所蔵する謡本である。役者には、現在使用している謡本だけでなく、役者の自宅に保存されている謡本についても提示をもらい、謡本の版元を確認し、精査が必要な朱による書き込みについては写真撮影を行った。結論・考察の箇所では、黒川所蔵の謡本には、大きく分けて3種類の謡本があるが、現在、役者をしている役者たちの多くは③番目に分類をする黒川内部で近年作成された謡本を使用している。したがって、以前に役者自身の先代が役者をやっておらず、自身が一代目の役者の場合には、結果的に近年作成された謡本を使用することとなるため、本調査では現役の役者よりも先代が役者をやっていた家を重点的に調査の対象とした。さらに、役者には立役者と囃子方がいるが、本調査では立役者と囃子方の役者のうち、謡本あるいは附の提示をしていただけた役者および太鼓方の役者の謡本と附を調査した。

以上の謡本について、(1)番組名、(2)版元名、(3)書き込み、(4)入手経路についてのインタビュー調査という4点から分析を行った。さらに、同じ番組の謡本を一人の役者が複数所蔵している場合には、どの謡本を使うのか、また、なぜその謡本を使うのかという理由についても聞き取り調査を行うことによって、役者たちがどのような謡本を使いやすいと感じているのかということについての分析も行った。

また、新たに黒川内部で作成された謡本については、謡本の製作に関わっていた当事者にインタビュー調査を行った。この当事者は謡本の製作当時、櫛引町(鶴岡市の2005年10月に市町村合併)役場勤めで、黒川能保存会の事務局として関わっていた人物である。インタビュー調査では、謡本製作に至るまでの理由、製作過程についての回答を得ることができた。

【結論・考察】

黒川所蔵の謡本には大きく分けて以下の3種類があることが明らかになった。それは、①師匠、あるいは自身による手書きのもの、②外部で購入したもの、③黒川内部で作成したものの3点である。以上の分析を通して、謡本の数が膨大である一方で、版元は類似するものが多く、謡本入手の背景に個人的に収集しただけでなく、師匠が窓口となって謡本を買い求めていたということが明らかになった。さらに、謡本の所蔵数の違いの背景に、家の分家といった黒川集落の持つ慣習も影響しているということが明らかになった。さらに、出稼ぎといった社会的な出来事によって、一時期謡本が数多く黒川に流入していたということも明らかになった。また、新たに黒川内部で謡本が作成されるようになった背景には、役者たちがそれ以前の個人別の謡本では全体の演能がそろわず、演能をそろったものにしたという演能上の要望があったことが明らかになった。こうした一連の考察は、黒川における謡本の所蔵状況と変遷を明らかにするのみならず、黒川において謡本が人々にどのようなものとして捉えられているのかということについても今後考察していく上での契機になると考える。